

マルキンだより



畜産PR大使「おーいたん」

公益社団法人 大分県畜産協会

TEL:097-545-6594

FAX:097-554-4049

第120号

令和3年1月分交付金概算払単価公表

肉用牛肥育経営安定交付金制度の令和3年1月分の交付金概算払単価が公表されましたので、概算払いを行います。

交雑種については、19,405.4円・乳用種については、39,958.7円の交付となります。

なお、肉専用種につきましては、交付がありませんでした。

詳細につきましては、肉用牛肥育経営安定交付金制度の交付金単価について【令和3年1月分】(独立行政法人農畜産業振興機構発行)をご覧ください。

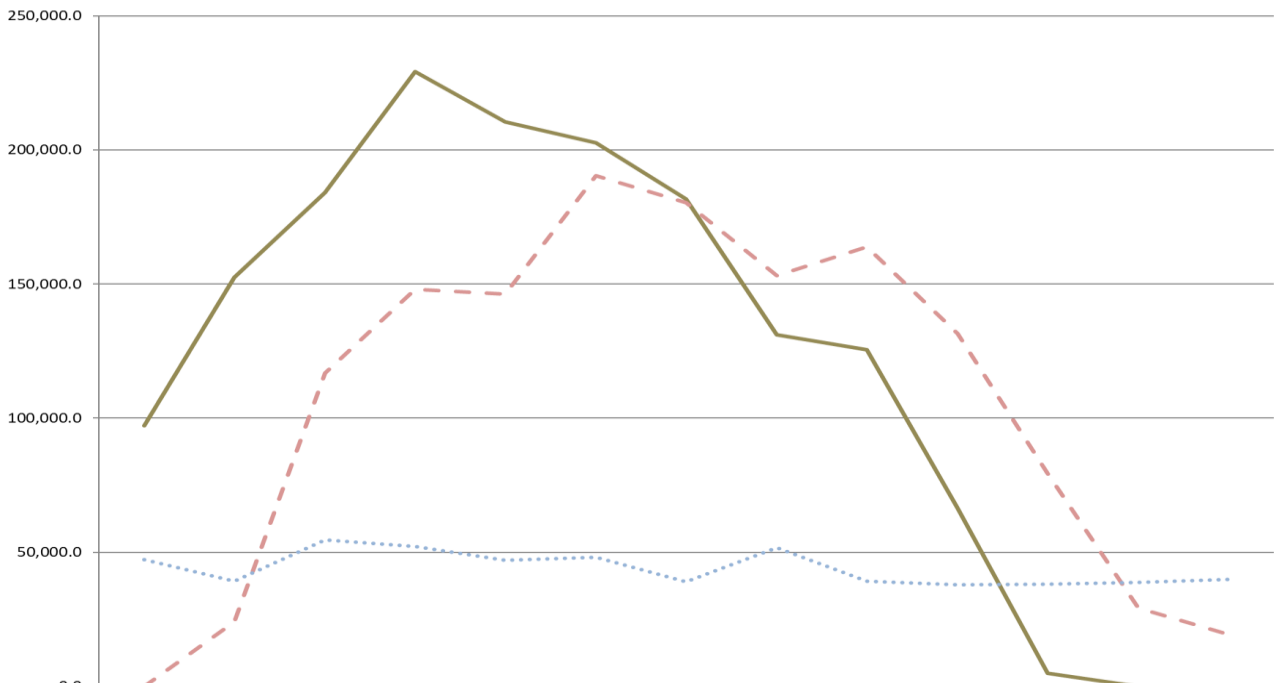
トピックス

●令和3年1月分の単価(概算)が公表されました。

●1月分の交付金交付は、3月29日(月)を予定しております。

交付金発動状況

単位:円



	R2.1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	R3.1月
— 肉専用種	97,175.7	152,529.3	184,151.7	229,133.7	210,448.8	202,686.3	181,742.4	130,996.5	125,602.6	66,388.27	4,881.6	0.0	0.0
- - 交雑種	0.0	24,121.8	116,715.6	148,130.1	146,220.3	190,413.9	180,387.9	153,076.5	163,894.5	131,468.4	79,365.6	29,124.9	19,405.4
..... 乳用種	47,339.1	39,319.2	54,562.5	52,145.1	46,925.1	48,078.9	39,031.2	51,616.8	39,206.7	37,969.2	38,144.7	38,791.8	39,958.7

牛マルキン事業に関するホームページ

★公益社団法人 大分県畜産協会 <http://oota.lin.gr.jp/>

当協会のホームページです。マルキン情報の他、市場結果、種雄牛情報等も掲載しております。

★独立行政法人 農畜産業振興機構 https://www.alic.go.jp/operation/livestock/assistance-marukin_00002.html

補填金単価の公表の他、単価算定に関する各種参考資料等が掲載されております。

★畜産物の市況展望【牛肉】

～景気悪化、外食不振で一段下げの可能性～

2月の牛枝肉価格は、10都道府県での緊急事態宣言の解除が見送られたことで前月に引き続き弱基調で推移した。変異株が各地で確認されたほか、ワクチン接種の遅れなどコロナ収束のめどが立っていない中、経済への影響も深刻さを増しており、3月も好材料は少ないとの見方が多数を占めている。

1月の牛枝肉価格は、和牛は去勢A5が前月比214円安の2,692円（前年同月比24円安）、同A4は203円安の2,447円（同151円高）、同A3は93円安の2,294円（同241円高）、同A2は104円安の2,020円（同255円高）と下方修正された。年明けから緊急事態宣言が発令され外食需要が急激に落ち込んだことで一気に失速した。

交雑種もB4が160円安の1,711円（同19円安）、B3が127円安の1,582円（同41円安）、同B2は85円安の1,418円（同75円安）。

量販店などの小売は内食需要で比較的堅調に推移しているが、単価の高い牛肉の売れ行きは鶏肉、豚肉に比べ頭打ちの様相を呈しているようだ。「年末年始は和牛などの高単価商材が動いたが、いよいよ景気悪化が個人支出に影響してくる」（量販店筋）と警戒する声も。GoTo停止、20時までの時短要請がホテル、レストラン関係に深刻な影響を及ぼし、個人店などは休業するケースも少なくない。テイクアウトや営業時間の変更など努力している店もあるが、売上減をカバーすることは難しく「資金繰りも厳しくなり、支払猶予の依頼も散見される」（業務卸）ほど。「年末に入荷したロースを全く手つかずのまま冷凍している。先が見通せず苦しい」（レストラン）など悲壮感が漂う。「多くの問屋が保管庫は満杯。生産者には申し訳ないがと畜しても保管するスペースがない」（卸）という。

ここへきて東京オリンピックの中止も囁かれるようになり、仮に中止又は延期が決定すれば牛枝価格は暴落する懸念も。相場安を受けて3月は出荷調整の動きが進む可能性があるほか、問屋の在庫過剰感から相対取引を見合わせる動きもある。和牛去A5で2,500円前後、A4で2,300円、A3で2,050円。交雑種は去勢B3で1,400円。

★肉用牛肥育経営における収益性の特徴

～畜産クラスターに係る全国実態調査結果から～

道元由紀（(公社)中央畜産会）

畜産クラスターの中心的経営体の育成のための参考値・指標値を整備するために、道府県畜産協会の協力のもと、全国の畜産経営体を対象に経営状況に係る全国実態調査を実施しており、肉用牛肥育経営の調査結果を中央畜産会が解説しております。興味がある方は別紙を参照してみてください。

（※公益社団法人中央畜産会 発行 畜産コンサルタント誌3月号 抜粋）

肉用牛肥育経営における収益性の特徴

—畜産クラスターに係る全国実態調査結果から—

道源 由紀 ((公社)中央畜産会)

はじめに

本会では、畜産クラスターの中心的な経営体の育成のための参考値・指標値を整備するために、道府県畜産協会の協力のもと、全国の畜産経営体を対象に経営状況に係る全国実態調査を実施している。

調査結果は、中央畜産会ホームページ (<http://jlia.lin.gr.jp/cluster/>) に掲載している。

本稿では、前々号の酪農、前号の肉用牛繁殖経営に引き続き肉用牛肥育経営（黒毛和種去勢）を対象に実施した令和元年度調査結果（平成30年度実績、以下「30年度」）について、家族労働力1人1日当たり所得階層上位20%（以下、「所得上位」という）と所得階層中位60%（以下、「所得中位」という）、所得階層下位20%（以下、「所得下位」という）を比較し、解説する。

なお、経営の概要については、前年度（平成29年度実績、以下「29年

度）」との全体平均値の比較および30年度肥育牛飼養頭数規模階層間の比較を交えて解説する。

経営の概要

表1に全体平均および肥育牛飼養頭数規模階層別の結果を示した。

1戸当たりの労働力員数（年間の総労働時間を2000時間で1.0人として換算）は30年度が2.4人、29年度が2.5人であった。

肥育牛飼養頭数は30年度が164.7頭で、29

(表1) 経営の概要（肥育牛飼養頭数規模階層別）

項目	単位	平成29年度実績	平成30年度実績					
		全体	全体	50~100	100~150	150~200	200頭~	
集計件数	戸	37	32	10	6	8	8	
労働力	労働力員数	人	2.5	2.4	1.3	2.3	2.8	3.4
	うち家族員数	人	1.9	1.8	1.2	1.9	2.4	2.1
肥育牛飼養頭数	肉用種	頭	148.4	164.7	77.6	121.5	171.0	299.5
	乳用種	頭	0.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	交雑種	頭	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	計	頭	148.4	164.7	77.6	121.5	171.0	299.5
耕・草地のべ面積	個別利用自作地	a	80.5	98.4	71.0	121.7	70.0	143.8
	個別利用借地	a	14.3	5.6	12.0	0.0	7.5	0.0
	共同利用地	a	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	計	a	94.8	104.1	83.0	121.7	77.5	143.8
肥育牛販売頭数	去勢若齢肥育	頭	64.3	92.5	39.9	68.8	98.9	169.5
	雌若齢肥育牛	頭	19.6	0.1	0.0	0.2	0.1	0.3
	成牛肥育	頭	0.1	3.1	4.2	9.3	0.0	0.0
	計	頭	84.0	95.7	44.1	78.3	99.0	169.8
(労働生産性)								
雇用依存率	%	14.5	18.5	9.3	22.7	10.7	34.5	
労働力1人当たり肥育牛飼養頭数	頭	64.3	71.3	67.0	56.1	70.9	88.6	
肥育牛1頭当たり年間労働時間	時間	36	32	34	38	33	24	
労働力1人当たり肥育牛販売頭数	頭	33.6	39.9	33.9	34.0	35.4	49.9	

年度（148.4頭）に比べて16.3頭（11%）多

かった。

去勢若齢肥育牛の販売頭数は、30年度が92.5頭で、29年度（64.3頭）に比べて28.2頭（44%）多かった。

30年度の結果を肥育牛飼養頭数規模階層別にみると、労働力員数は1.3～3.4人で、飼養頭数規模が大きくなるほど多くなり、雇用依存率は、9.3～34.5%で、200頭以上階層が最も高かった。

労働力1人当たり肥育牛飼養頭数は

56.1～88.6頭で、200頭以上階層が最も多かった。

肥育牛1頭当たり年間労働時間は200頭以上階層が24時間で、200頭未満の各階層が33～38時間であるのに対して、9～14時間短かった。

肥育牛販売頭数合計は飼養頭数規模が大きくなるほど多くなり、200頭以上階層が169.8頭で最も多かった。

以上の労働力員数と肥育牛販売頭数から労働力1人当たりの肥育牛販売頭数を算出すると、200頭未満の各階層が33.9～35.4頭であるのに対して、200頭以上階層は49.9頭となり、50～100頭階層に比べて16頭多かった。

表2に家族労働力1人1日当たり所得階層別の経営の概要を示した。

1戸当たりの労働力員数は、所得上位が2.5

(表2) 経営の概要 (家族労働力1人1日当たり所得階層別)

項目		単位	平成30年度実績			
			全体	下位20%	中位60%	上位20%
集計件数		戸	32	7	18	8
労働力	労働力員数	人	2.4	3.3	2.0	2.5
	うち家族員数	人	1.8	2.0	1.9	1.6
飼養頭数	肉用種	頭	164.7	201.9	126.1	226.7
	乳用種	頭	0.0	0.0	0.0	0.0
	交雑種	頭	0.0	0.0	0.0	0.0
	計	頭	164.7	201.9	126.1	226.7
のべ面積	個別利用自作地	a	98.4	235.7	44.4	100.0
	個別利用借地	a	5.6	0.0	10.0	0.0
	共同利用地	a	0.0	0.0	0.0	0.0
	計	a	104.1	235.7	54.4	100.0
販売頭数	去勢若齢肥育	頭	92.5	102.0	74.8	128.3
	雌若齢肥育牛	頭	0.1	0.1	0.2	0.0
	成牛肥育	頭	3.1	14.0	0.0	0.0
	計	頭	95.7	116.1	75.0	128.3
(労働生産性)						
雇用依存率		%	18.5	36.9	5.8	32.4
労働力1人当たり肥育牛飼養頭数		頭	71.3	65.5	68.7	83.8
肥育牛1頭当たり年間労働時間		時間	32	35	33	26
労働力1人当たり肥育牛販売頭数		頭	39.9	35.2	37.5	51.3

人、所得中位が2.0人、所得下位が3.3人で、最も多かったのは所得下位で、次いで所得上位となった。雇用依存率は、所得下位が36.9%、次いで所得上位が32.4%であった。一方、所得中位は5.8%と低くなっており、集計対象の多くが家族主体経営で占められていることが伺える。

肥育牛飼養頭数は所得上位が226.7頭、所得中位が126.1頭、所得下位が201.9頭であり、所得上位が最も多くなり、所得上位は所得中位と比べて80%、所得下位と比べて12%多かった。

去勢若齢肥育牛販売頭数は、所得上位が128.3頭で、所得中位が74.8頭で、所得下位が102.0頭であり、飼養頭数と同様に所得上位が最も多くなり、所得中位と比べて72%、所得下位と比べて26%多かった。

労働力1人当たり肥育牛 (表3) 売上高 (肥育牛1頭当たり)

飼養頭数は、所得上位が83.8頭で、所得中位が68.7頭で、所得下位が65.5頭であり、所得階層が高くなるにつれ多くなり、所得上位は所得中位、所得下位と比べて1.2~1.3倍多かった。

肥育牛1頭当たり年間労働時間は、所得上位が26時間、所得中位が33時間、所得下位が35時間であり、所得階層が高くなるにつれ短くなり、所得上位は所得中位、所得下位と比べて7~9時間短かった。

以上の労働力員数と肥育牛販売頭数から労働力1人当たりの肥育牛販売頭数を算出すると、所得上位は51.3頭で最も多くなり、所得中位が37.5頭、所得下位が35.2頭であるのに対して、13.8~16.1頭多かった。

これらのことから所得上位は、所得中位や所得下位に比べて、労働効率が良いことが伺える。

収益性分析

1) 売上高 (肥育牛1頭当たり)

表3に売上高 (肥育牛1頭当たり) の概要を示した。

売上高のうち、肥育牛販売収入は、所得上位が89万1874円で最も多くなり、所得下位(77万5833円)と比べて15% (11万6041円) 多かった。

売上高計は、所得上位が89万9742円で最も多くなり、所得下位77万7314円と比べて12万2428円 (16%) 多かった。

2) 当期生産費用 (肥育牛1頭当たり)

表4に当期生産費用 (肥育牛1頭当たり) の概要を示した。

当期生産費用のうち、もと畜費は、所得上

項目	単位	平成30年度実績			
		全体	下位 20%	中位 60%	上位 20%
集計件数	戸	32	7	18	7
子牛販売収入	円	0	0	0	0
育成牛販売収入	円	0	0	0	0
肥育牛販売収入	円	832,525	775,833	831,492	891,874
堆肥販売・交換収入	円	4,707	1,481	6,514	3,287
その他	円	1,490	0	868	4,581
売上高計	円	838,723	777,314	838,874	899,742

位が54万6812円、所得中位が49万5462円、所得下位が53万5972円であり、所得上位が最も多く、所得中位と比べて5万1350円 (10%) 多かった。

購入飼料費は、所得上位が20万2547円、所得中位が20万1677円、所得下位が19万1791円であり、所得階層が高くなるにつれ多かった。

雇用労働費は、所得上位が1万6029円、所得中位が2426円、所得下位が2万199円であり、表2のとおり雇用依存率の高い所得上位と所得下位が多かった。

家族労働費は、所得上位が3万8887円、所得中位が5万7647円、所得下位が3万1113円であり、所得中位が最も多かった。

労働費計は、所得上位が5万4915円、所得中位が6万73円、所得下位が5万1312円であり、所得中位が最も多かった。

以上の結果、当期生産費用合計は、所得上位が85万6180円、所得中位が81万2116円、所得下位が82万4049円であり、所得上位が最も多く、所得中位との差は4万4064円 (5%) となった。

3) 収益性 (肥育牛1頭当たり)

表5に収益性 (肥育牛1頭当たり) の概要を示した。

売上総利益は、所得上位が8万4435円、所得中位が8177円、所得下位が△7万4747円であり、所得上位は所得中位に比べて7万6258

円、所得下位に比べて15万9182円多

かった。これは、所得上位が所得中位、下位に比べて売上高が最も高く、逆に売上原価が最も低かったためである。一方、所得下位は売上高が77万7314円であるのに対し、売上原価が85万2061円となりマイナスになった。

営業利益は、所得上位が1986円、所得中位がマイナスに転じて△6万1424円、所得下位が△13万7710円となった。

経常利益は、所得上位が4万1791円、所得中位が△3万946円、所得下位が△10万8036円となった。

経常所得は、所得上位が8万678円、所得中位が2万6701円、所得下位が△7万6922円となった。

また、出荷牛1頭当たり年間経常所得も所得上位が

(表4) 当期生産費用 (肥育牛1頭当たり)

項目	単位	平成30年度実績				
		全体	下位20%	中位60%	上位20%	
集計件数	戸	32	7	18	7	
種付料	円	0	0	0	0	
もと畜費	円	515,557	535,972	495,462	546,812	
購入飼料費	円	199,705	191,790	201,677	202,547	
自給飼料費	円	520	379	733	113	
敷料費	円	2,474	2,308	1,961	3,962	
労働費	雇用労働費	円	9,290	20,199	2,426	16,029
	家族労働費	円	47,739	31,113	57,647	38,887
	計	円	57,029	51,312	60,073	54,915
診療・医薬品費	円	7,066	5,059	7,951	6,798	
電力・水道費	円	5,695	5,891	6,295	3,957	
燃料費	円	4,474	4,123	4,409	4,992	
減価償却費	建物・構築物	円	5,973	3,305	5,701	7,967
	器具・車輛	円	11,436	11,207	12,465	9,021
	家畜	円	0	0	0	0
	計	円	17,109	14,513	18,166	16,988
修繕費	円	5,647	5,459	5,982	4,973	
小農具費	円	1,453	1,499	1,442	1,437	
消耗諸材料費	円	6,226	4,700	6,384	7,347	
賃料料金その他	円	1,411	1,043	1,582	1,338	
当期生産費用合計	円	824,365	824,049	812,116	856,180	
当期生産費用合計(家族労働費除く場合)	円	776,626	792,936	754,469	817,293	

(表5) 収益性 (肥育牛1頭当たり)

項目	単位	平成30年度実績				
		全体	下位20%	中位60%	上位20%	
集計件数	戸	32	7	18	7	
売上高	円	838,723	777,314	838,874	899,742	
売上原価	期首飼養牛評価額	円	1,019,350	1,072,105	1,014,937	977,943
	当期生産費用	円	824,365	824,049	812,116	856,180
	期中成牛振替額	円	0	0	0	0
	期末飼養牛評価額	円	1,011,711	1,044,092	996,355	1,018,816
	売上原価	円	832,004	852,061	830,697	815,307
売上総利益	円	6,719	-74,747	8,177	84,435	
販売費・一般管理費計	円	70,959	62,963	69,601	82,449	
営業利益	円	-64,241	-137,710	-61,424	1,986	
営業外収益計	円	44,170	42,045	42,149	51,491	
営業外費用計	円	11,872	12,370	11,671	11,686	
経常利益	円	-31,898	-108,036	-30,946	41,791	
経常所得	円	15,841	-76,922	26,701	80,678	
家族労働力1人当たり年間経常所得	千円	1,942	-6,409	1,577	10,039	
出荷牛1頭当たり年間経常所得	円	26,083	-129,471	44,920	133,200	
所得率	%	1.6	-9.2	3.1	8.8	
売上高経常利益率	%	-4.0	-13.1	-3.9	4.6	

13万3200円と最も多
 くなった。

これらの結果、所
 得率は、所得上位が
 8.8%、所得中位が
 3.1%、所得下位が△
 9.2%となった。

4) 収益性諸要因分析

表6に収益性諸要
 因分析の概要を示し
 た。

肥育牛1頭当たり年
 間経常所得は、所得
 上位が8万678円、
 所得中位が2万6701
 円、所得下位が△
 7万6922円であり、
 所得階層が上位ほど
 高かった。

一方、肥育牛1頭当たり年間飼養管理労働
 時間をみると、所得上位が22時間、所得中位
 が28時間、所得下位が33時間であり、所得階
 層が上位ほど短く、所得上位は所得下位に比
 べて11時間(67%)短かった。

以上の肥育牛1頭当たり年間経常所得と飼
 養管理労働時間から、所得上位は所得中位、
 下位に比べて、労働効率の良いことが伺える。

出荷牛1頭当たり販売価格は、所得上位が
 147万9683円、所得中位が141万5433円、所得
 下位が135万1858円であり、所得階層が上位
 ほど高かった。所得上位は所得下位に比べて
 12万7825円(9%)高かった。

枝肉出荷による実際販売単価は、所得上位
 が2947円、所得中位が2753円、所得下位が
 2457円であり、所得階層が上位ほど高かった。
 所得上位は所得下位に比べて490円(20%)
 高かった。

(表6) 収益性諸要因分析

項目	単位	平成30年度実績			
		全体	下位20%	中位60%	上位20%
集計件数	戸	32	7	18	7
(肥育主体経営)					
肥育牛1頭当たり年間経常所得	円	15,841	-76,922	26,701	80,678
肥育牛1頭当たり年間飼養管理労働時間	時間	28	33	28	22
飼料生産のべ10a当たり労働時間	時間	8	7	9	6
(肉用種の場合)					
出荷牛1頭当たり販売価格	円	1,415,580	1,351,858	1,415,433	1,479,683
肉用牛生体1kg当たり販売価格	円	1,850	1,702	1,861	1,967
実際販売単価(枝肉出荷の場合)	円	2,731	2,457	2,753	2,947
出荷牛1頭当たり出荷時体重	kg	770	795	765	759
もと牛1頭当たり導入価格	円	896,615	926,733	898,975	860,429
もと牛生体1kg当たり導入価格	円	3,062	3,034	3,096	3,002
導入時平均もと牛体重	kg	293	305	290	287
年間肥育回転率	回	0.59	0.57	0.59	0.60
平均肥育日数	日	633	619	639	634
販売肥育牛1頭1日当たり増体重	kg	0.76	0.80	0.74	0.75
出荷牛1頭当たり増価額	円	545,503	417,123	564,978	609,708
対導入頭数事故率	%	1.9	1.4	1.8	2.7
対常時頭数事故率	%	1.1	0.8	1.1	1.6

出荷牛1頭当たり出荷時体重は、所得上位
 が759kg、所得中位が765kg、所得下位が
 795kgであり、所得階層が上位ほど軽かった。
 所得上位は所得下位に比べて36kg(5%)
 軽かった。

このことから、所得上位は、出荷時体重は
 軽いものの、枝肉出荷による実際販売価格が
 高いことにより、出荷牛1頭当たり販売価格
 が他の所得階層に比べて高くなったことが伺
 える。

もと牛1頭当たり導入価格は、所得上位が
 86万429円、所得中位が89万8975円、所得下
 位が92万6733円であり、所得階層が高いほど
 低かった。所得上位は所得下位に比べて7%
 (6万6304円)低かった。

導入時平均もと牛体重は、所得上位が
 287kg、所得中位が290kg、所得下位が305kg
 であり、所得階層が上位ほど軽かった。所得
 上位は所得下位に比べて18kg(6%)軽かっ

(表7) 施設投資・資金借入状況 (肥育牛1頭当たり)

項目	単位	平成30年度実績			
		全体	下位20%	中位60%	上位20%
集計件数	戸	32	7	18	7
肥育牛1頭当たり施設機器具平均投資額	円	63,885	31,825	80,728	52,633
肥育牛1頭当たり資金借入残高	円	468,877	549,022	552,812	172,898
肥育牛1頭当たり年間借入金償還負担額	円	47,508	32,892	69,066	6,686
経常所得対借入金償還額比率	%	-448.0	-54.2	-778.5	8.1

た。

年間肥育回転率は、所得上位が0.60回、所得中位が0.59回、所得下位が0.57回であり、所得階層が上位ほど高かった。所得上位は所得下位に比べて0.03回高かった。

平均肥育日数は、所得上位が634日、所得中位が639日、所得下位が619日となり、所得中位が最も長く、所得下位が最も短かった。

販売肥育牛1頭1日当たり増体重は、所得上位が0.75kg、所得中位が0.74kg、所得下位が0.80kgであった。

出荷牛1頭当たり増価額（(肥育牛販売収入－もと畜購入費)÷肥育牛販売頭数）を算出すると、上位は60万9636円、中位は56万4978円、下位は41万7123円であり、所得上位は、所得中位と比べて4万4730（8%）、所得下位と比べて19万2580円（46%）多くなっていた。

施設投資・資金借入状況

表7に施設投資・資金借入状況（肥育牛1頭当たり）の概要を示した。

肥育牛1頭当たり施設機器具平均投資額は、所得上位が5万2633円、所得中位が8万728円、所得下位が3万1825円となり、所得中位が最も多く、所得下位が最も少なくなった。所得上位は所得下位と比べての差は2万808円（65%）少なかった。

肥育牛1頭当たり資金借入残高は、所得上

位が17万2898円、所得下位が54万9022円であり、所得上位は所得下位に比べて37万6124円（31%）少なかった。

まとめ

今回の調査結果から、家族労働力1人1日当たり所得上位の階層は、労働力1人当たり飼養頭数が多く、肥育牛1頭当たり飼養管理労働時間が短く労働生産性が高いという特徴がみられた。

また、もと牛購入価格が低く、少ない労働時間で、枝肉単価の高い牛を生産し、出荷牛1頭当たり増価額を大きくすることにより、収益を上げているという特徴がみられた。

これらのことより、

- ①労働力員数
- ②肥育牛1頭当たり飼養管理労働時間
- ③もと牛購入価格
- ④枝肉実際販売単価
- ⑤出荷牛1頭当たりの販売価格
- ⑥出荷牛1頭当たり増価額

の6項目が肉用牛肥育経営の重要な指標になると考えられる。

今回の調査結果を畜産経営改善指導のための参考として活用していただきたい。

最後に、調査にご協力いただいた道府県畜産協会の皆さまに厚くお礼申し上げます。

(どうげん ゆき・(公社)中央畜産会経営支援部(支援・調査)調査役)